

「エッセンシャル・ワークの逆説」を超えて

— 「ブルシット・ジョブ」、ケア、再生産労働—

酒井 隆史

大阪府立大学教授

「エッセンシャル・ワークの逆説」

グローバルなパンデミック状況において、しばしば日常生活が機能停止するなかで、ひとつの奇妙な逆説的にもみえる現象が浮上してきた。

まず、この肥大化した複雑奇怪なる「経済」を停止してみても、それでも停止をできない必要不可欠である仕事があることがわかった。それは「エッセンシャル・ワーク」と定義されていた仕事であり、主要には、医療や健康、食料生産、物流、交通、教育といった業種によって構成されていた。

そしてそれとともに、この「エッセンシャル・ワーク」に従事する「エッセンシャル・ワーカー」が「エッセンシャル」でありながら、つまり、かれらの存在と働きなしにはこの世界そのものが機能停止する重大な作業に関与しているにもかかわらず、労働条件においておおよそ劣悪であるという状況もみえてきた。日本でも同様である。政府の無策と感染拡大とが相乗しながら悪化していく医療現場からの悲

鳴、そしてそれによってさらに悪化していく労働環境と逼迫する生活のなかで具体的に医療従事者が大量に職場を去るという深刻な事態のいっぽうで、「医療従事者にありがとう」といった感謝だけがむなしく町に流れ（大阪では駅のアナウンスでこの感謝の言葉がひっきりなしに述べられている）るというグロテスクともみえる光景が展開している。

このように、いわば「エッセンシャル・ワークの逆説」とでもいうべきものがパンデミック状況下でむきだしになったのである。そして、この逆説をすでに現代社会そのものの核心をなす現象として位置づけていたのが人類学者デヴィッド・グレーバーだった。

かれの著書の『ブルシット・ジョブ』（酒井、森田和樹、芳賀達彦訳、岩波書店、2020年）では、まさに医療研究者のハンニバル（匿名）なる人物が医療現場での経験をこう表現している。「仕事をして得られるお金の総額とその仕事でどれだけ役に立つのかということは、ほとんどパーフェクトに反比例している」（訳273頁）。かれだけではなく、多くから寄せられた報告はこうした逆説を記録していた。それらも検討しながら、グレーバーはこの逆説をこう定式化している。

「その労働が他者の助けとなり、他者に便益を提供するものであればあるほど、そして作りだされる社会的価値が高ければ高いほど、おそらくそれに与えられる報酬はより少なくなる」（訳271頁）。

さかい たかし

大阪府立大学教授、専攻は社会思想史、都市社会論。主要著作に『完全版 自由論』（河出文庫、2019年）、『暴力の哲学』（河出文庫、2016年）、『通天閣一新・日本資本主義発達史』（青土社、2011年）。訳書には、デヴィッド・グレーバー『官僚制のユートピア』以文社、『負債論』以文社（監訳）、マイク・デイヴィス『スラムの惑星』明石書店（監訳）など。

この定式には逆もある。つまり、その労働が他者にとってなんの意味もなく、なんの社会的価値もつくりださなければださないうほど、その報酬は高くなる傾向がある、というものだ。この「エッセンシャル・ワーク」の対極にある仕事を「ブルシット・ジョブ」(以下Bullshit JobsからBSJと略したい) とかれは呼んだ。

この「ブルシット・ジョブ」はあえて日本語をあてるとすれば「クソどうでもいい仕事」ぐらいになるのだが、定義はこうなる。

「BSJとは、あまりに意味を欠いたものであるために、もしくは、有害でさえあるために、その仕事にあたる当人でさえ、そんな仕事は存在しないほうがマシだと、ひそかに考えてしまうような仕事を指している(bullshitは、無意味な、でたらめな、ウソのといった意味のスラング)。もっとも、当人は表面上、その仕事が存在するもっともらしい理屈があるようなふりをしなければならず、さらにそのようなふりをすることが雇用上、必要な条件である」(訳27-28頁)。

もう少しだけいって、この仕事は無意味であって、たとえそれがなくなったとしてもだれも困らないと、やっている当人も多かれ少なかれ感じているが、しかし、それはいわないことがお約束になっている、それがBSJである。いま、そんなBSJがどんどん増殖して、かつ、そうでない仕事にも、どんどん「ブルシット化」の波が押し寄せている。そんな状況の見通しが、この概念を生んだ。

具体的にはどういうものか？ グレーバーに最初にBSJのアイデアが浮かんだのは「企業顧問弁護士」が酔っ払って口にした「オレのクソみたいな仕事なんてないほうが世のためだ」というぼやきからだ。とすれば「企業顧問弁護士」が、BSJである可能性は高い。『ブルシット・ジョブ』には、高級マンションの門番、お飾りの受付、国際機関のなんとかコンサルタント、映画制作会社のなんとかエグゼクティブなどなど、さまざまな「BSJ従事者」よりの報告がある。そこでリストアップされるものは、現代

の「エリート」とみなされている職業、一般的に労働条件のよいとされる現代的職業が目立つ。ある意味で、典型的なBSJとは、「アッパーミドル」階層に集中する傾向にあるともいえるかもしれない。それだけではなく、ここに非BSJであった仕事がBS化するという現象もつけくわえておく必要がある。たとえば、わたしたち大学教員である。その仕事の割合のなかで書類作成や会議参加、さまざまな事務作業の占める時間が年々増大するかたわらで、研究教育の時間が縮小するいっぽうであることはよく知られているだろう。

ここからわかるように、BSJは労働条件の劣悪な「きつい仕事」という意味ではない。たとえば、トイレの清掃は、労働条件の劣悪な「きつい仕事」である。ところが、その仕事をおこなうひとの多くが、その仕事を「ブルシット」なものとはみなしていない。それどころか、その仕事は他者に利する行為である、つまりながしか社会に意味のあることをしているという自覚がもたれている。ここが重要なポイントである。社会的価値に乏しければ乏しいほど、実入りはよくなり(市場価値は高くなり)、社会的価値に富んでいけば富んでいるほど、実入りは悪くなる(市場価値は低くなる)。要するに、だれかがキツくて骨の折れる仕事をしているとすれば、その仕事は、世の中の役に立っている可能性が高い。つまり、だれかの仕事が他者に寄与するものであるほど、当人に支払われるものはより少なくなる傾向にあり、その意味においても、よりきつい仕事となっていく傾向にある。

「エッセンシャル・ワークの逆説」を生みだす文脈である労働をめぐる観念の二要素

このようなBSJの増殖をみるならば、「エッセンシャル・ワークの逆説」は、ますますきわだってくる。いったいそれをもたらしているのはなんなのだろう？ このような現象が生まれる歴史的・文化的文脈としてグレーバーがあげる要因のひとつが、わたしたちの社会がもつ労働をめぐる観念である。

この観念の要素を二つに分類することができる。

1) 労働は有無をいわずそれ自体に至上の価値があるとする観念

この中世に端を発し、資本主義の展開とともに普及したヨーロッパにおける観念が、社会的意味のある仕事、やりがいのある仕事ほど、報酬は低くてよいという、わたしたちの社会に根づいた観念の背景にある。どういふことだろうか？ 総じて、仕事に社会的に充実感があつたり、よろこびがあつたりするものは、報酬は低くてよいという通念がこの社会あることは実感できるだろう。たとえば（小中学校の）教員である。日本でもかつては教員がストライキをおこなうこともあつたが（海外ではいまでも多くの国ではふつうにみられる）、それに対して、「聖職」たる教員がそれ以外の職業と同様のストライキに訴えることへの非難がみられた。いまでももし日本で教員がストライキを起こそうものなら、いつせいにそのような指弾がくるだろう。現在の日本での教員の労働条件のきびしさはだれもが知っているが、それが許容されているのもこうした感覚が一因だろう。そもそも資本主義の形成と展開によって、労働とは人間がそれを通して生存を確保する手段であるのみならず、それ自体、人間の向上に資するモラル上の義務であるとする観念が強化されていった。この観念は、労働はそれ自体が報酬なのであり、それ以上の報酬の要求は無用であるという発想とむすびつく。それだけでなく、労働はそれ自体で価値があるという価値観は、「みじめで不必要な仕事をする」ほうが道德的にもすぐれているといった観念にまで倒錯する。そして日本は、ヨーロッパ以上に、こうした労働そのものに価値があるといった観念が強力である。それゆえ、この倒錯、すなわち、仕事が無意味であること、有害であること、苦行ですらあることそのものになにかしかの優越性を認める観念も根深いのである。

2) 労働とは無からの創造という意味での生産にかかわるいとなみであるという観念

この観念は、労働とは弱められた神の創造であるというヨーロッパに伝統的な発想であり、これも資本主義の形成とともに独自の展開をみせた。「弱められた神の創造」であるとは、要するに、無からの

生産であるという意味である。たしかに、わたしたちは労働というとすぐに、それまでなかったなにかをこの世にもたらすいとなみとしてイメージしがちである。ところが、労働の現実をみるならば、そのイメージとのズレはいかんともしがたい。グレーバーのよく出す例でいえば、ガラスのコップはこの世に生みだされ作業は一度きりであるが、そのコップはたとえばレストランあるいは家庭で何万回と洗われ保管されて、わたしたちの食生活に奉仕するだろう。コップをめぐってそれを現実にもたらした時間やそれに携わった人間よりも、その「メンテナンス」にかかわった時間や人間のほうがはるかに凌駕するのである。「メンテナンス」のいとなみは、労働の現実のかなりの割合が、無からの創造という意味での生産、19世紀から20世紀の後半にかけて主要な生産のイメージとなった「モノの生産」ではなく、その保存や点検、補修、修繕などに関与していることを示唆している。さらに、これもかれのよくあげる例でいえば、地下鉄労働者である。ロンドンで地下鉄労働者がストライキをおこなったとき、そのピラにかかれら自身がみずからの仕事の細目をあげたものがあつて、それをみたグレーバーは、かれらのあげる業務の大半は、迷子を探したり、客の問い合わせに応じたり、忘れ物を管理したり、客どうしのトラブルやあるいは犯罪に目を光らせたりといった、輸送に直接かかわる職務よりもそのほとんどが人間に対する配慮にかかわるものであることがわかつた。つまり、わたしたちの労働のかなりの部分が、モノの生産ではなく、モノやひとのケアの次元にかかわっているのである。グレーバーはコロナ禍の初期段階に『リベラシオン』紙に掲載されたエッセイでつぎのように述べている。「現在の危機によってひとつの結論を導き出すことができたとすれば、古典的な意味での真に「生産的」な——つまり、それまでは存在しなかつた物理的対象を生産するという意味での——雇用は、最も必要不可欠なものであつても、ごく一部にすぎないということである。そして、ほとんどの「エッセンシャルな」仕事は、実際にはケアの連鎖の延長線上にあるということである。つまり、だれかの世話をし^{ケア}たり、病人の看護をし^{ケア}たり、生徒に教え

たり、モノを移動したり、修理したり、掃除したり、保管したり、他の生物の欲求に応じたり、かれらが繁栄できる条件を確保したり、といった具合である」(David Graeber, vers une «bullshit economy», in Liberation, 2020/5/27)

このことがどのように「エッセンシャル・ワークの逆説」と関係しているのだろうか？ それは、労働はモノを無から創造する生産であるという発想が、ケアの系列にかかわる活動を生産にかかわる活動としては不可視化し、そのうえで価値を切り下げさせるといった構造とむすびついているからだ。そしてここに、性別役割分業の形成が密接にかかわっていることは即座に理解されるだろう。つまり、ケアの次元に女性があてがわれ、その活動が私的領域に閉じ込められながら、「愛の名のものに」無償化される、あるいは価値が切り下げられる。たとえば、ケアにかかわる活動が現在のようにますます市場化されていったとしても、その価値は低いままなのである。そして、その価値の低さは、いまだその担い手の多くが女性であるということとかわっている（たとえば、国連の報告によれば、世界の医療・介護従事者の約70%を女性が占めている）¹。

「家事労働に賃金を」運動の遺産 — 「再生産労働」とケアについて

ここでリスト化されたケアの系列にある活動は、フェミニズムの文脈では「再生産労働」と呼ばれてきたものとおおよそ重なっている。「再生産労働」とは、「モノの生産」としての労働にあたる労働力を、そもそも生産(出産)し、養育し、精神と身体の両面を支えるための、家事をはじめとするさまざまな活動を指している。この次元をひとつの生産への、しかもたんに労働力を再生産するにとどまらず、このわたしたちの世界の維持に対する根源的寄与として認識する発想の根源には、「再生産労働」を俎上あげたフェミニズムの系譜がひとつにはある。

1970年代のフェミニズムは、家事に対して賃金を要求することで、「家事」そのものをひとつの労働

(「家事労働」として、ひいては価値形成に寄与する労働としてあぶりだした。家事に対して賃金を要求することによって、「家事」の意味は一挙に「労働」へと転換するのみならず、その領域そのものが問題ぶくみの(葛藤にさらされ、闘争につらぬかれた)領域として浮上したのである。家事とは利潤をふくむ価値形成に寄与するひとつの労働であるが、資本制的生産様式の支配する社会のもとにあつて、その領域とそれを構成する諸活動は女性の属性の「自然の発露」として不可視化され、ということは無償化され、そしてその価値を切り下げられてきた。その活動にあらためて賃金を要求することで、彼女たちは(この領域を市場の論理に巻き込むというのをはるかに超え)、この主要にケアの領域にかかわる活動やその前提をジェンダーにからんで権力や搾取の行使される政治として認識させたのである。そしてそのような作業を通して、その再生産領域の諸活動にひそむ(ここでいう)社会的価値を深く認識させるとともに、その活動からそれにまつわるジェンダーや資本がらみの支配-従属関係を解除しようとしたのである²。

このような革新的分析を発展させたのは、『ブルシット・ジョブ』でも最終章に登場してその活動家たちが重要な分析を展開してみせる「家事労働に賃金を」運動であるが、その潮流にグレーバーも深く影響を受けている。

くり返しになるが、この「再生産労働」にかかわる次元が「エッセンシャル・ワーク」とおおよそ重なっており、それが市場化の波をこうむっているなかで「エッセンシャル・ワークの逆説」を強化しているのだ。つまり、社会的価値は高いが(市場)価値は低いという構造である。

このような逆説はすべて、「経済」の倒錯によっているというのが、グレーバーのひとつの究極の診断であるといえる。「人間の生活とは、人間としてのわたしたちが、たがいに形成し合うプロセスである。極端な個人主義者でさえ、ただ同胞たちからのケアとサポートを通してのみ、個人となる。そしてつきつめていけば、「経済」とは、まさに人間の相互形成のために必要な物質的供給を組織する方法なの

である」(『ブルシット・ジョブ』訳342-343頁)。ところが、資本主義のもとで「生産性」が至上の価値とみなされ、左派ですらも「成長」をすべての福祉の条件とみなすとき、本来、人間の相互形成のための物質的供給であった「経済」によって、人間の相互形成が破壊されるといった倒錯がもたらされることになる。

グレーバー自身は、こうしたフェミニズムの開いた地平と人類学的知見を統合させながら、「再生産労働」における「再生産」というふくみも超え(グレーバーは「再生産労働」という概念を克服すべきものとみている)、人間の生産とモノの生産の関係を人類史的に問い返すほうにむかっていた。しかし、課題はおなじである。いまはひどい時代でもあるが、わたしたちの世界の本当の基盤をなすものを発見するためにはよい機会を提供している。「ポスト・コロナ」と

は、このゼロ次元からの再建のための時間であるということになるだろう。■

《注》

- 1 Kevin Sapere, Covid-19 has made housework more visible, but it still isn't valued, in The Washington Post, 2021/4/8 (https://www.washingtonpost.com/outlook/2021/04/08/covid-19-has-made-housework-more-visible-it-still-isnt-valued/?fbclid=IwARIKw3YvOJSSpGRJ6vVm_3wry3OizpxdyUEMRolcxxUoYGDm6vua9qc-YU8)
- 2 基本的文献としては、マリアローザ・ダラ・コスタ『家事労働に賃金を——フェミニズムの新たな展望』インパクト出版会、1986年(伊田久美子、伊藤公雄訳)をみよ。この潮流については近年再評価が活発である。たとえば、Louise Toupin, 2018, *Wages for Housework: A History of an International Feminist Movement, 1972-77*, Pluto Press をみよ。

